



Title	付加疑問文の特性と共起関係について
Author(s)	三原, 京
Citation	Osaka Literary Review. 1997, 36, p. 118-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25359
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

付加疑問文の特性と共起関係について

三 原 京

1. 序

本論では、Sperber and Wilson による関連性理論の枠組みを用いて付加疑問文の分析を行う。付加疑問文は従来、主に談話の機能の観点から分析されてきた。したがって、その統一的な意味や共起関係については明らかにされておらず、一般化が行われていないという点で問題があると言える。そこで本論では、さまざまな用法を持つ付加疑問文を統一的に説明するのに関連性理論が有効であることを示したい。以下、2節では付加疑問文の特徴についてまとめ、3節で関連性理論の概念について説明し、4節で分析に入る。5節は結語である。本論では、極性不一致／一致の付加節が何を伝えるのかを明らかにした上で、非平叙文 (non-declarative sentences) の一部が付加疑問文として成立しない理由について説明する。

2. 付加疑問文の特徴

付加疑問文は、主文の主語を代名詞で繰り返し、主文とは逆の極性（肯定ないし否定）を有する助動詞を用いることで作られる。付加節中の助動詞に、上昇調ないし下降調の音調の核が置かれる。上昇調で発話される場合は、情報を求める機能があり、下降調で発話される場合は、聞き手の同意や確認を求める機能がある。

- (1) a. He likes his JÒB, DÓESn't he? (rising tone)
- b. He likes his JÒB, DÒESn't he? (falling tone)
- c. He doesn't like his JÒB, DÓES he? (rising tone)

- d. He doesn't like his JÒB, DÒES he? (falling tone)
 (Quirk *et al.* 1985:811)

また、極性の変わらない付加疑問文もあり、これは通例上昇調で発話される。この場合、話し手は他の人（ないしは自分自身）の考えること、あるいは言うことに対して、驚き、アイロニーといった態度を表す。

- (2) a. Your car is OUTSIDE, ÍS it? (ibid.: 812)
 b. So he doesn't like his JÒB, DÓESn't he? (ibid.: 813)

3. 関連性理論の諸概念

本節では、付加疑問文の分析に必要な関連性理論の3つの概念、すなわち、高次表意、手続きき情報、解釈的使用について紹介していくことにする。

3.1 高次表意 (higher-level explicature)

発話文の表出命題の復元においては、代名詞等の指示表現の指示物を同定する作業である指示付与 (reference assignment)、多義表現を一つの意味に絞りこむ作業である一義化 (disambiguation)、情報を膨らませる作業である富化 (enrichment) といった作業が行われる。このうち富化は、発話文の表出命題の復元に限定されるものではない。例えば、(3)の発話文の場合、上述の作業により復元された表出命題がそのまま話し手の伝えたい情報とは限らず、(4)のような命題に対する話し手の態度といった高次の記述が、話し手の伝えたい情報であることがある。

- (3) I' ve got a lot of work to do.
 (4) a. The speaker believes that he has a lot of work to do.
 b. The speaker regrets that he has a lot of work to do.
 (Blakemore 1992: 61)

このような表出命題に対する話し手自身の態度が高次表意と呼ばれるもので

あり、富化の作業を経て得ることができる。

3.2 手続き的情報 (procedural information)

Wilson and Sperber (1993) によれば、発話により伝えられる情報には、概念的情報 (conceptual information) と手続き的情報 (procedural information) がある。概念的情報は、概念をコード化した、いわば “what” の側面に関するもので、論理的かつ真理条件的である。一方、手続き的情報は、この概念的情報をどう扱うかという “how” の側面に関するものであり、‘so’ や ‘after all’ のような談話連結詞などが、これに相当する。例えば (5) の2文を (6) のように ‘so’ や ‘after all’ で連結すると、(6a) の場合は (5a) が (5b) の証拠になり、(6b) の場合は (5b) が (5a) の証拠となる。

(5) a. Peter’s not stupid.

b. He can find his own way home.

(6) a. Peter’s not stupid; so he can find his own way home.

b. Peter’s not stupid; after all, he can find his own way home.

(Wilson and Sperber 1993: 11)

このような手続き的情報は、概念をコード化しているわけでもなければ真理条件に貢献しているわけでもなく、聞き手がどの推論過程を経ればよいかを示すことによって、解釈の推論的段階を制約している。

3.3 解釈的使用 (interpretive use)

次に挙げる (7) の B の発話文を見てみよう。

(7) A: What did Jane say?

B: The prime minister is never going to stand down.

(8) a. The prime minister will never stand down.

b. She will never stand down.

c. Mrs Thatcher? She’ll never resign.

(Blakemore 1992: 103–104)

(7) の B の発話文はエコー発話であり、これは Jane が言ったことの表示であると理解される。しかしながら、これは必ずしも Jane が実際に発した文であるとは限らない。彼女が発した文が (8a-c) のいずれであったとしても、その内容の類似性から、(7) の B の発話文は Jane の発話の解釈 (interpretation) として関連性を有する。この類似性による表示、すなわち解釈的使用 (interpretive use) は、記述的使用 (descriptive use) とは、かなり異なる。記述的使用は、言語がある状況を記述する場合であり、真理条件的である。それに対して、解釈的使用は他 (話し手自身のこともある) に帰属する思考 (attributed thoughts) の解釈を表示するもので、非真理条件的であり、表示と表示されるものとは必ずしも一致している必要はなく、論理的に類似してさえいけばよい。

4. 理論適用

本節では、3節で見た関連性理論の概念を用いて、どのように付加疑問文が説明できるかを見ていくことにしたい。まず、極性不一致／極性一致の付加節が何を表すかを平叙文の場合で見えていき、それから非平叙文である命令文、疑問文、感嘆文の場合について、その特性と共起関係を考察する。さらに、付加疑問文がアイロニーを表す場合についても考察する。

4.1 平叙文 (declarative) の付加節

本論では、Wilson and Sperber (1993: 22) に基づき¹⁾、付加疑問文の付加節を、高次表意に対する制約をコード化する手続き的信息と考える。まず、極性不一致の付加疑問文について見ていこう。極性不一致の付加節の手続き的信息は、命題内容 P に対する次のような高次表意に対する制約を示す。

(9) P を〈X の観点から〉望ましい思考 (desirable thoughts) と見なし、処理せよ。

上昇調で発話される場合と下降調で発話される場合の用法に対する説明はそれぞれ(10a)、(10b)のような認知的要因が関与すると考えられる。

- (10) a. 望ましい思考 → 疑問を表す用法
 認知的要因：Pを望ましい考えと述べたいが、Pの真実性に関する情報を求める場合
 例) He's married, isn't he?
- b. 望ましい思考 → 同意を求める用法
 認知的要因：Pを望ましい考えと思い、それについて相手に同意を求める場合
 例) It's a lovely day, isn't it?

次に、極性一致の付加疑問文について見てみよう。極性一致の付加節がコード化する手続き的情報は、次のようなものである。

- (11) 〈Xの〉Pという意見を dissociative な態度で処理せよ。

この場合の用法に対する説明は次のような認知的要因が関連すると考えられる。

- (12) a. dissociative な態度 → 同意を求める用法
 認知的要因：dissociative な気持ちでPとは思わず、それについて相手に同意を求める場合
 例) Your car is outside, is it? (= (2a))
- b. dissociative な態度 → アイロニーを表す用法
 認知的要因：dissociative な気持ちでPとは思わず、それを強く述べる場合
 例) So he likes his job, does he? (Quirk *et al.* 1985: 812)
- c. dissociative な態度 → 驚きを表す用法
 認知的要因：dissociative な気持ちでPとは思わないが、本当は予測しなかった場合
 例) You've failed in the exam, have you?

4.2 命令文 (imperative) の付加節

関連性理論では、命令文は手続きの情報として (13) を伝えると考えられる。²

(13) P を潜在的 (potential) な望ましい思考として処理せよ。

従って、命令文+極性不一致付加節 (14) と、命令文+極性一致付加節 (15) は、それぞれ (16)、(17) を伝えている³ と説明できる。

(14) Open the window, won't you?

(15) Open the window, will you?

(16) P を話し手の観点から潜在的で望ましいと考え、かつ〈X の観点から〉潜在的で望ましい思考と見なし処理せよ。

(17) P を話し手の観点から潜在的で望ましいと考え、かつ〈X の観点から〉P という意見を dissociative な態度で処理せよ。

4.3 疑問文 (interrogative) の付加節

関連性理論では、疑問文は望ましい思考を表すために使われる解釈的使用 (interpretive use) であると特徴づけられる⁴。従って、疑問文も極性不一致の付加節もともに望ましい思考を表し、余剰的となるため共起不可能である。また、望ましい思考を表す疑問文と dissociative な態度を表す極性一致の付加節は、対立するため共起不可能となる⁵。

(18) a. *Who gave you permission, {didn't / did} who?

b. *Can you tell me that, {can't / can} you?

c. *Does she like her job, {doesn't / does} she?

4.4 感嘆文 (exclamative) の付加節

関連性理論の枠組みでは、感嘆文は疑問文とともに、望ましい思考の解釈的使用である⁶。従って、極性不一致の付加節は、疑問文の場合と同様に、

感嘆文とも共起できないはずである。ところが実際には(19)に示すように共起可能であり、本論での分析にとって一見問題になりそうである。

- (19) a. How thin she is, isn't she?
 b. What a beautiful painting it is, isn't it?

(Quirk *et al.* 1985: 812)

ここで重要なのは、感嘆文は疑問文と異なり、次の2つの想定をコード化しているということである (cf. Sperber and Wilson (1986: 253-254), Wilson and Sperber (1988b:151), Itani (1991:135), Higashimori (1993:131))。

- (20) a. the speaker already has the relevant (completion of the) propositional form in mind;
 b. the (completion of the) propositional form is relevant to the speaker. (Higashimori 1993: 131)

従って、(19)に見られるような感嘆文+極性不一致の付加節は、(21)のような意味を伝えることになる。

- (21) 話し手がすでに頭の中に描いている P (=she is very thin / it is a very beautiful painting) について、この情報の発見を望ましく関連性があることと見なし、かつ P を〈話し手の観点から〉望ましい思考と見なし処理せよ。

(21) では、「望ましい」という語が重複しているようにも見えるが、余剰的な重複ではないため、共起可能と説明できる。なお、極性一致の付加節は dissociative な態度を表すため、望ましい思考を表す感嘆文とは対立し、共起不可能である。

- (22) a. *How thin she is, is she?
 b. *What a beautiful painting it is, is it?

4.5 アイロニー (irony) を表す付加疑問文

4.1 ですで見たと通り、平叙文に極性一致の付加節がつくと、アイロニーになることがある。これは、極性一致の付加節が手続き的信息として示す dissociative な態度がアイロニーにつながるためだと考えられるが、ここではそれについて、さらに詳しく見ていくことにする。

関連性理論では、アイロニーは、他（あるいは自分自身）に帰属する思考 (attributed thoughts) の解釈的使用と特徴づけられている⁷。即ち、アイロニーとは (23) のような気持ちを伝えるものである。

- (23) 話し手は暗に、他（あるいは自分自身）に帰属する意見 P にエコーし、同時に P ではないと思う。

それでは次の例で、平叙文+極性一致の付加節が、どのようにアイロニーとして解釈されるかを見てみよう。

- (24) It's a nice piece of work, is it? (irony)

(24) では、(25) のように、dissociative な気持ちが込められていると解釈可能である。

- (25) 話し手は〈X の〉意見 P (= it's a nice piece of work) にエコーし、かつ〈X の〉P という意見を dissociative な気持ちで P とは思わないものと処理せよ。

なお、極性一致の付加節は望ましい思考を表すので、アイロニーとはならない。

- (26) It's a nice piece of work, isn't it? (not irony)

4.6 4 節のまとめ

本節では、付加疑問文の付加節を、高次表意に対する制約をコード化する

ものであると考え、それが伝える手続き的意味は、極性不一致の場合は望ましい思考であり、極性一致の場合は dissociative な態度であることを説明した。そして、これを基に、付加疑問文が成立しない場合、すなわち疑問文＋極性不一致／一致の付加節、感嘆文＋極性一致の付加節の場合は、主文と付加節との関係が余剰的または対立的であり、なめらかな結合が行われない場合であることを説明した。また、平叙文＋極性不一致の付加節がアイロニーになり得ないのに、平叙文＋極性一致の付加節がアイロニーになり得るといふ事実については、極性不一致の付加節が伝える望ましい思考はアイロニーと相容れないが、極性一致の付加節が伝える dissociative な態度は、アイロニーに通じるためであると説明した。

5. 結 語

以上、本論では、極性不一致／一致の付加疑問文の特性と共起関係について、平叙文、命令文、疑問文、感嘆文のそれぞれの場合について分析を試みた。本論の分析の基盤である関連性理論は、話し手の心的態度を考慮したものであり、これによって、認知的な要因に基づく統一的な説明が可能となった。

なお、統語的に複雑な付加疑問文については、紙幅の関係でここでは取り扱わなかった。これらについては、稿を改めて考察することにした。

注

1. Wilson and Sperber (1993) では、付加疑問文は取り扱われていないが、question particle としての 'eh', dissociative particle としての 'huh', 仏語の interrogative particle 'ti', シッサラ語の hearsay particle 're' については、高次表意に対する制約をコード化する手続き的信息であると述べられている。本論では付加疑問文の付加節を、これらの particle と同じものであると考え。
2. "...imperative sentences are specialized for describing states of affairs in

worlds regarded as both potential and desirable.”

(Wilson and Sperber 1988a: 85)

3. 命令文+極性不一致付加節と命令文+極性一致付加節とのニュアンスの違いについては、次の説明を参照。

(i) Open the DÒOR, WÒN'T you?

(iii) Open the DÒOR, WÒN'T you?

(v) Open the DÒOR, WÍLL you?

Type (i) tag is least insistent, and type (v) tag is most insistent.

(Quirk *et al.* 1985: 813)

4. “In the case of an interrogative her [= the hearer's] task is to identify the individual to whom the speaker regards the thought represented as being desirable (relevant).”

(Blakemore 1992: 116)

5. 方言によっては、疑問文に極性一致の付加節をつけることが容認される。しかし、それは特殊なケースであるため、本論における考察の対象とはしない。次の説明参照。

As for interrogatives, tags are quite impossible after them for my dialect [= British English], and I know of them only from references to American English (Bolinger, 36, 46) and Australian English (Cattell, 616). From these sources I have culled the following examples:

(77) a. Did he go there, did he?

b. How did he go there, did he?

c. Did John do it, was it?

d. Will he fairly soon, will he?

(BUT *Will he, will he?)

e. Did John drink beer, did he?

(BUT *Did John drink beer, didn't he?)

Since I cannot control the data for tagged interrogatives, I shall say nothing more about them.

(Hudson 1975: 29)

6. “...interrogatives and exclamatives involve an interpretive relation between speaker's thought and desirable thoughts.”

(Sperber and Wilson 1986: 231)

7. “...irony involves an interpretive relation between the speaker's thought and attributed thoughts or utterances...”

(Sperber and Wilson 1986: 231)

“...irony should be analysed in terms of the notion of *interpretive resemblance*, and more particularly on the notion of *echoic use*.”

(Blakemore 1992: 166)

主要参考文献

- Blakemore, D. (1987) *Semantic Constraints on Relevance*, Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. (1989) "Linguistic Form and Pragmatic Interpretation: the Explicit and the Implicit," *The Pragmatics of Style*, ed. by L. Hickey, 28-51, London: Routledge.
- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Oxford: Blackwell.
- Blass, R. (1990) *Relevance Relations in Discourse: A Study with Special Reference to Sissala*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bolinger, D.L. (1957) *Interrogative Structures of American English*, Alabama: University of Alabama Press.
- Cattel, R. (1973) "Negative Transportation and Tag Questions," *Language* 49, 612-639.
- Clark, B. (1993) "Let and Let's: Procedural Encoding and Explicature," *Lingua* 90, 173-200.
- Declerck, R. (1992) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo: Kaitakusha.
- Higashimori, I. (1993) "A Relevance-Theoretic Analysis of *Huh / Eh*," *English Literature Review* 37, 83-140, The English Literary Society, Kyoto Women's University.
- Higashimori, I. and D. Wilson (1996) "Questions on Relevance," *UCL Working Papers in Linguistics* 8, 111-124.
- Hudson, R. A. (1975) "The Meaning of Questions," *Language* 51, 1-31.
- 稲木昭子 (1990) 「極性一致の付加疑問文－談話の流れの中で－」『言語研究』97、73-94、日本言語学会。
- Itani, R. (1993) "The Japanese Sentence-Final Particle *ka*: A Relevance-Theoretic Approach," *Lingua* 90, 129-147.
- Leech, G. N. and J. Svartvik (1975) *A Communicative Grammar of English*, London: Longman.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』東京:大修館書店。
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.
- Sperber, D. and D. Wilson (1981) "Irony and the Use-Mention Distinction," *Radical Pragmatics*, ed. by P. Cole, 295-318, New York: Academic Press.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*,

Oxford : Blackwell.

Sperber, D. and D. Wilson (1987) "Précis of Relevance: Communication and Cognition," *Behavioral and Brain Science* 10, 697-754.

Sperber, D. and D. Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition* (second edition), Oxford: Blackwell.

Wilson, D. and D. Sperber (1988a) "Mood and the Analysis of Non-Declarative Sentences," *Human Agency: Language and Value*, eds. by J. Dancy, J. Moravcsic, and C. Taylor, 77-101, Stanford: Stanford University Press.

Wilson, D. and D. Sperber (1988b) "Representation and Relevance," *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*, ed. by R. M. Kempson, 133-153, Cambridge University Press.

Wilson, D. and D. Sperber (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.